

子どもの読みに対応した教師の働きかけ

『かさこじぞう』の実践より

豊郷小学校 上野 芳樹

I はじめに

どの子ども生き生きと教材に向かわせたい

私が低学年の担任になったのは二回目である。担任するたび、まだ人目を意識して取繕うことも知らず、自分の感情をありのままに出して動いている子供達をかわいいと思いつつ、だが、こちらの思い通りには決して動いてくれない子供達であることにいらいらさせられることも多かった。

授業中でも、今までピチピチとはずんで体全体で反応していたかと思うと、全く集中を欠いて收拾がつかなくなることもある。同じ子供達なのに、どうしてそんなにかわってしまふのだろうか。

最初のうちは、「その日の気分によって変わるのだ」とか「もともと落ち着きのない子供達なんだ」などと子どものせいにしたいたい気持ちが多分にあった。

だが、自分の授業記録をおこし続けているうちに、子供達が悪いのではない、非はやはり自分の方にあるのだと認めざるをえなくなってきた。子供達は、いつでも教師の問いに一生懸命応えようとしている。それをつぶしてしまっているのは、私の方なのだ。授業記録をおこしてみるたび、「ああ、また馬鹿なことやってしまってる」と、自己嫌悪に陥ることの連続であった。

だが、そうした自分の貧しい授業を見つめる中で、どんな教師の働きかけの時子どもは動くのか、あるいは動かないのかという問題について、意識的に考えるようになっていった。

作品の文章、言葉を生き生きとした感覚で子どもがとらえ、そこに描かれている世界に自分も入りこんでいくような読みの学習は、どういう教師の働きかけによって成立するのだろうか。

「かさこじぞう」の授業における様々な失敗や小さな成功の事実をもとにして、この問題を考えてみたい。

II 子どもの読みにどう対応したか

(1)子どもの出してきた読みを材料にして展開する

Ⅱ 「かさこ作りを思いつ場面」の授業からⅡ

《教材文》

むかし むかし、ある ところに、じいさまと ばあさまが ありましたと。
たいそう びんぼうで、その日 その 日を、やっと くらして おりました。
ある 年の 大みそか、じいさまと ばあさまは、ためいきを ついて いいました。

「ああ、その へんまで お正月さんが ござらっしゃると いうに、もちこの 用意も できんなあ。」

「ほんにのう。」

「なんぞ、もちこと かえる もんでも あれば よいがのう。」

じいさまは、ぎしきを 見回したけど、なんにも ありません。

「ほんに、なんにも ありやせんのを。」

ばあさまは、土間の 方を見回しました。すると、土間の すみっこには、夏の 間に かりとつて おいた すが つんで ありました。

「じいさま、じいさま、かきこ こさえて、町さ もつて いったら、お金に、かえられんかのう。」

「おうおう それがええ そうしょ。」

そこで、じいさまと ばあさまは、土間におり、ざんざら すげをそろえました。ふたりして せつせと すげがさを あみました。

ばあさまがすげを見つけて「じいさま じいさま、かきここさえて、町さ売りに行ったら、もちこ買えんかのう。」と言うところを読んだときのことである。 誰かが、

「なんで、じいさまじいさま、て二回も言うの？」 と言いだした。

「うれしいさかいよ」

「やつと見つかったで」

すぐ他の子からそんな意見が返ってきた。私もそれでいいと思った。何にもないとあきらめきっていたところにすがが見つかって、単純で人の良いじいさまばあさまは大喜びしているのだと、ここは読めればよい。だが、子供達の書込み（個人学習）には「ちよつとだけうれしい」と書いている子もいる。その子らは、発言していかないがきつと心の中では納得しかねているに違いない。その子らの読みをぶつけてみることによつて、この場面をより明確に読取らせることができるのではないかと思ひ、それを取上げて考えさせてみた。

「ここ、みんなの書込みを見たら、二通りの考えがあつたの。ひとつは、ばあさま大喜びで言つてる、という人と、ばあさまはちよつとだけうれしい、という人と。どっちかな？ ニコニコして言つてる？ そうでもない？」

子供達にたずねてみると、やはり二つに分かれた。

恭子 さいごのところに「買えんかのう」て書いてるでな、ほこのとこ考えてるでな、まだあんまりわからへんの。

洋平 買えるか買えんかわからへん。

C 大喜び！

T ちよつと待つて。恭子に賛成の人ある？

けい子 ひよつとしたら、町の人にはかきこいらんかもしれん。

T 心配があるんね。

C ちがう！大喜び。

明仁 大喜びやでな、二回も言うてるん。

ゆうじ 元気出してるん

麻美 たいそうびんぼうやでな、かさこひとつでも買う人があったらもちこ買える。

紀志 見回しても何もなかったけどな、土間の方見たら売れるもんがあったで。

則和 近い！ 貧乏やしな、最後の最後やでな、やっとそれでな、見つかってよかった。

*子供達の考えは二つに分かれたまま、チャイムが鳴ってしまったので、次の時間改めて話し合うことにした。

その授業記録をもとに教師の対応を考えてみたい。

【授業記録】

T 昨日、ばあさまは「大喜びではずんで言うてる」という人と「心配そうに言うてる」という人と二つあったね。その問題をはっきりしよう。その前や後を読んで「ぼくは、ここを読んでそう思う」というところを見つけてごらん。

C (考える)

T (子供達の間を回りながら考えを聞いている)

T はい、まゆ子、お前はどっち？

繭子 大喜び

T どこでそう思う？

繭子 「じいさま じいさま」て二回言うてる

なんか、うれしそうに言うてる

T 二回も言うてるから……

ゆうじ 元気そうに言うてる。

明仁 大喜び。ばあさまがな、「じいさまじいさま」てな、ゆうてな、じいさまが「おお

おお」てゆ うたでな。

ももみ あっ！明仁君に近い。「おおおお」てゆうてるのがな、なんかおじいさんだけの気持ちとちご てな、おばあさんもにこにこしてゆうてるで、ほうなるん。

T ばあさまが、にこにこしてはずんで言うてるから、じいさまも「おおおお」て喜んでる

「じいさま……」て言ったら「う……ん」てなるかもしれんね。

朱音 あのな、もしも買えるんやったら「買えんかのう」なんて言わへん。

T ああ、なるほど。

洋平 大喜びだったらな、「買えるだろう」やけどな心配やでな、「買えんかのう」て言うてる。

茂 もしも大喜びやったらな、「じいさまじいさま、かさここさえて町さ売りにいったらもちこ買える」いうのにな、「買えんかのう」

T 不安があるのね。

好 「じいさまじいさま」のとな、そんな心配そうに言うんやったら、一回だけしか言

わん。

弘幸 大喜びしてへんかったら、「じいさま」てちっちゃい声になる。

T うん、なるほどね。

(2)音読から心情に迫る

読み手の子どもが物語の中の人物になりきった時、子どもの柔らかな感性は生き生きと動き始める。

子供達を登場人物になりきらせる一つの方法に、音読がある。「かさこじぞう」では、じいさまやばあさまの会話を音読しながら、その心情に触れるという展開をとることも多かった。

ここで、音読からじいさまの心情をさぐって見た授業について考えてみたい。じいさまが、大年の市で声をはりあげてかさを売り歩く場面を音読をもとにして展開しようとした。

【授業記録】

T 町へやってきたら、たーくさんの人。まつ売りや、うす売りのひと、正月買いもの人出大にぎわい。このけしき見て、じいさまはどんな気持ちになった かな。

けい子 こんな人がいっぱいいたら、売れると思った

C 同じ。

C これなら売れるぞ

麻美 こんなに人がいっぱいいるんやったら、売り切れるぞと思った。

智仁 こんなにいやるんやったらもって作ってきたらよかった。

学 人がいっぱいいるしな、買ってくれる人もいっぱいいるかもしれんぞな

ももみ 売る前にな、売れるでドキドキした。

T ああ……じゃ、みんな、ここ、じいさまになって読んでみましょう。「ええかさや」のとな。

じいさまも声をはりあげました。はい

Cs 「ええ、かさや かさやあ。かさこはいらんか。Tだれかひとりやってみよういう人

C やりたい!

洋平 (読む・いい読み)

紀志 (読む・いい読みだが広がらない)

C 口々に自分たちで読みだす

T ちよっと待って。じいさまはどんな声出したって書いてる?

C 「はりあげました」

C 「はりあげました」やで大きい声

紀志 (もう一度読みなおす。さつきよりのびやかになる)

T まだやりたい人ある?

C (やりたい者をみんな立たせて、みんなで読ませる・うなるほどの声になる。)

T はいストップ

そうやってじいさまは声をはりあげた。そこにじいさまはどんな気持ちを込めてるの？その声に

ゆうじ こうてくれへんとあかんで

智仁 ほんで大きい声出したん

知秀 うんとな、遠くの人に聞こえへんで

ゆうじ (小さい声では) 六年教室の方まで届かへん

T うん、遠くの方まで聞こえるように。

直樹 えつとな、でっかい声はりあげなな、せつかく かさこをな、作ってな、ばあさまと二人で。ほんで 売りにきたのにな、小さい声で、人に聞こえへん声 で言うてたら売れへんで、でかい声出したん。

ゆうじ 直樹君に近い。ほんな小さい声やったら近くの人にしか聞こえへんで

学 遠くの方からもな、きてくれる人もあるでな、声をはり上げたん

好 えつとな、もし売れんかったらな、ばあさまがしょんぼりするかもしれないでな、声はりあげたらかっつくれやると思っ

けい子 おおぜいの人に聞こえんとあかんで

麻美 大きな声やったらな、みんな、いいもんやと思っつて近寄ってくる。

T なるほど、どんなええもんかなと思わる。

智仁 うんとな、「ええ まつはいらんか」てな、ゆうてやるでな、負けずに言うたん。

T ああ、ええこと言わった。

明仁 他の店よりか、負けんぐらい

T 他にもいっぱい店があるんよね。よその店に負けんように。

則和 「まつはいらんか」て声をはりあげてるでな、おじいさんもな、負けずに声をはりあげたらな、まつをほったらかしにしてな、かさのそこへ来るで。

(C 笑い)

直樹 山からまつを切つてきて売ってる人かてな、声はりあげてるのにな、じいさまだけ声はりあげてんかったらな、ほつちの松のほうだけ買うてな、じいさまの方は買いにこうへん。

T よし、だいたいほれでええかな。

ももみ ちよつとちがう

みんなが声をはりあげてるんやで、じいさまもつられていつてな、ほんで言うてるのつられて。ああ、おもしろいやんけ。

ももみ まつを売ってるのに、おじいさんもつられて言ってるん

朱音 あのな、まつやうすを売ってる店もあつたらな、おじいさんかてな、売れてるんやでな、まつやとかは。じいさんかてかさこ売れると思っつて声はりあげてるの

T さつきは、負けずに、言っただけ

こんなに売れてるんだから、おれも売れるぞ、て気がしてきた、いうんね。

学 もちこも持たんで帰れば、ばあさまがっかりするからな、おおきな声で言うたん。

T ああ、ばあさまのためにもね。うん、いいやね。

ももみ あ、学君に近い。おじいさんだけが作ったん違うんやでな、ばあさまもいっしょにつくったんやでな、ばあさまのためにも。

T けれど、どうだったの？

C 売れん

T 「だれもふりむいてくれません」やね。

後略

この授業では、ふだんあまり集中してくれない、ゆうじや直樹がかなり積極的に発言している。それは、やはり、音読から心情をさぐっていくという展開が、子どもの思考に即したものだっただからだと思う。

(3) 情景をていねいに描き出すこと

【失敗の授業から学ぶ】

「かさこじぞう」の中心的な場面である、ふぶきの野原でじいさまが地蔵様に出会う場面を扱ったときのことである。一斉学習に入る前に、一時間書込みの時間をとった。そこで一人ひとりがノートに書いた内容は、じいさまの心情に寄りそって、かなり豊かにとらえられているように思った。だから、私は、こうした子供達の読みを出し合い、互いの読みを共感しあうことによって、十分豊かに読取ることができると思った。だが、実際に授業してみて、そんな安易な展開では子どもは動かないことを思い知らされた。

【授業記録】

* 「とんぼり とんぼり」のじいさまの心情を話しあった後、地蔵様に出会ったときのじいさまの言葉を問題として考える

T やつてきて、地蔵様を見て

「おお、お気のどくにな。さぞつめたかろうのう」 (板書)

ここ、じいさまになって読んでみて

* ここで何人かに読ませてみる。

T 「いったい地蔵様のどんなところがお気の毒だなぁって思えたんだろうか……………」?

どんなすがたがお気の毒だっと思えたの めぐみめぐみ ……………

茂 雪にうもれてる姿。

洋平 人間みたいに服も着てない。

T ああ、わかるわかるっていう人

智仁 えっとな、お堂もないしな、木のかげもない

T うん、だから？

智仁 ふきつさらしやでつめたいやろうなあ

則和 地蔵様はな、冬も春もずっとそこに立ってなあ かんて

T うん…………… のりゆきは？

のりゆき ………………

*私は、書込みしている段階で子供達はこの場面の状況や地蔵様の姿を十分とらえられていると判断した。だから、この場面の情景を描く作業は省いてもいい、T一のような問いで、子供達は読みとつたものをどんだん出してくるはずだと思っていた。ところが、予想に反して子供達の動きはにぶい。

T じゃ、そこもういっぺん読んでみましょうか。

「 あ、ここだ」というのを見付けてね。

「……………お堂はなし、木のかげもなし」

茂 お堂はなし、木のかげもなし

T そこが、どうお気の毒だっと思えるの？

洋 悲しいみたいに見える。おじいさんの家は、食べ物はないけど家はある

T わかる？ おじいさんの家と比べて、て言ってる

好 まだ、おじいさんおばあさんのほうが家があるしな、まだいいけど

T この地蔵様には、家もない

則和 まだおじいさんには家もあるけんどな、家に入ってちよつとぐらいあつためられるけんどな、地蔵様はな、何にもなしやでな、ただじつとすわってるだけやで

T じつと立ってるしかない

で、今、お堂も木のかげもないことがなぜそんなにお気の毒なのか？

*子供達の発言に何か物足りないものを感じながら、どう展開したらいいのかわからず、とにかくもうひとおししてみようと思っこんな問いをしたのだった。

貴之 自分がおもち買えんかったで

T はあ？何言うたん、こういう姿みたら？

貴之 自分がおもち買えんかったこと思いだす。

則和 地蔵様といっしょの気持ちやで

T ちよつと。今貴之が言うてるの、ごつうええこと言うてるみたいなんやけど、わかる？

智仁 うんとな、地蔵様とじいさまはな、じいさまはもちこ買えんかったしな、地蔵様はつめたいしな、同じ気持ちなん

T どう？勇人 わかる？

勇人 ………………

朱音 おじいさんは、かさこ売れると思っただけ売れんかったしな、地蔵様も寒いしな、何もないから地蔵様と同じ気持ちなん

T ああ、わかってきた？何もないのがわしと同じだなあて思えた。しんご、いえる？
しんご ………………

*私としては、ふぶきの中に立っている冷たさなどを もっと語ってくればいいが、という思いで投掛けた問いだった。だが、そういう素朴な読みの段階を経ないうちに、貴之の発言が出た。貴之の意見は、この場面の状況や、これまでのじいさまの心情がきつちりつかめている子には、受止められるが、そうでない子には、全くわけがわからないことであつた。この後、貴之の意見をみんなのものにしようとしたのだが難しく子供達の半数以上が授業から離れていってしまったのだつた。

この時の授業を見て下さった福田先生は、私の授業の問題点を明確に指摘された。

『……………一番いけなかつたのは、上野さんが、子どもの考えを過信しすぎて的確な発問ができなかつたということでしょう。で、一時間、地藏様とおじいさんの思いはいつしよやつたということに終始してしまつたわけね。

それと、今日の子どもに、ふぶいてる様子が見えてたんでしようか。ふぶきの音は聞こえていたんでしようか。……………じいさまの行為や情景を一つ一つついでいねいにやつていかれたら、わからん子までも「もつともつと自分よりつらい、寒い」と見えてきたと思うんです。そのへんが的確になされなかつたから考えばかりに終始して、ふくらみのある授業にならなかつたのではないかと思ひます。』

全く福田先生の指摘された通りだと思つた。確かに私は子どもを過信していた。だから、授業がよどんできたとき、どうすることもできず、「わかる？」と子どもにもたれかかるほかなかつた。

また、これも子どもを過信したせいであるが、この場面の状況を文に即していねいに描く作業をおろそかにしてしまつたことが、決定的な誤りであつた。いくらひとり読みで豊かに読取つていようと、それはそのときのことである。みんなで話合う一斉学習の場でも、もう一度、どの子にも具体的な情景を描かせることから出発すべきであつたのだ。語りあうための共通の絵をもたないのに、T-1のような問いを出されれば、子供達が困惑するのも当然のことであつた。

そして、確かな具体がないまま、じいさまの心情追求に流れていってしまったから、理屈っぽいやせた授業になつてしまうのも当然のことであつた。

次の日、私はこの場面をもう一度授業しなおしてみた。情景を一つ一つついでいねいに描いていく作業から出発してみたらどうなるか、確かめてみたかつたからである。また、それ以上に、子供達の胸の内には豊かに持つていたはずのイメージを引出せないまま、済ませるのはいかにも悔しかつたからである。

【やりなおしの授業の記録】

T 土曜日の勉強のところ、もう一度やってみたいと思ひます。

まず、この地藏様はどんな姿だったのかな、てもういっぺんきちんと確認してみましよう。

知秀君読んでください。

T はい、そこまでだね。

C 地藏様は何人いたんですか

C 6人!

T そうね。6人いたんだね。(黒板に絵をかく)

で、この地藏様はどんなようすだったんですか。

卓 雪にうもれていた。

T 雪にうもれていた。どんなふうに?

C 片側だけ

朱音 もうまっ白白に

T 片側だけ……。(黒板の絵にかき加える)

明仁 頭にも

T 頭もやな。……めぐみちゃん、なんで全部でなくて片側だけなのめぐみ……

麻樹 雪が上から降ってるんじゃないやなくて横から

C ふぶきやで

朱音 もしじぞうさんがこうたってたんなら、風がこっちむきに吹いてるで(身振りであらわす)

ゆうじ ふぶきやったら積もってくる

T そうそう、上からチラチラじゃなくって、こうやって横から、ビヤ〜とふきつけてるんやね。

C (口々に言出す)

T で、ゆうじが言うてるのは、こうやって吹きつけてくる雪がどんどんたまってくる、言うんやね。

弘幸 お堂もないし、木もないさかいな、木があったらな、あたらんと、ちよつとしかたまらへんけど な、お堂もないさかいな、こっちだけ雪が積もってるの

T もしお堂でもあれば、こんなことにはならないん だけど、そのお堂が……なし!
智仁 木のかげもなしやで。

則和 木でもあったらな、ちよつとは安心するけどな それもないしな、それにな、ふぶきがかかるで。

ももみ 雪やったらちよつとはどうもないけど、ふぶきはきついさかいに
T そうね、ゆうじが言ったように、どんどんつもってくるんだ。(絵をかき加えながら)

ももみ 足のところかちよつと埋もれてる

T うん、足は見えてるの?

C s 見えへん!

T もう見えてないんよね、こちらへん。

C うん、体の半分以上

T 体の半分以上見えないんよね。こっち側だけがふきとばされて、チラッと顔が見える。そんなふうになってる

じゃ、それを見て「おおお気の毒にな」て言ってるんだけど、じいさまは、どのあたりで言ってるの？

C 近く

しんご 遠くやったらふぶきで見えへん

ゆうじ ふぶきやでこうして歩いてたんやで（手で顔をさえぎるまね）

学 うんとな、「ふと顔をあげると」やでな、近くから

T 今大事なこと言わったね。

C うん、「ふと」やで

T さっき、ゆうじが言ったように、こんなふうにして歩いてるんやで、遠くなんか見てるはずないよ　ね。で、こうやって歩いてきて、ふと顔をあげたら、近くに見えたんだって

ほうすると、ここで、「おお、おきのどくにな、さぞつめたかろうのう」て、言ってますね。「さぞ」っていうのは、きっと。「きつとつめたいだろうなあ」て言うてるんやね。どうしてこんな言葉が出るんでしょう。

（みんなの手が上がるまで待つ）

恭子 お堂はなし、木のかげもなして書いたるでな、お堂もあつたらちよつとは良いけんどな、お堂もなしやでな、かわいそう。

麻樹 ふきつさらしの野っ原やでな、……………自分でもな、……………あの、雪が当たるまま立ってたら冷たいでな、ほやさかい……………

T 今麻樹ちゃんがボツボツ言うてやることわかるかな、ごつつういいこと言うてやるんやで。

もういっぺん言ってくれる？

麻樹 ふきつさらしの野原やでな、自分も雪とかにあたるままやたらな、つめたいさかいに

T うん、そうだ。

C 自分も冷たい

洋平 あのな、ふぶきやでな、地蔵様だけでないの。自分かてな……………

T 終わりまできちんと言って

洋平 あのな、地蔵様だけがふぶきとちごて、自分もふぶきなんやで

秀郎 うんとな、ふぶきやけどな、じいさまはうごけるさかいな、家とかにかえられるしな、地蔵様は、家とかもないしな、動けへんで

T またええこと言わったね。今秀郎君はつけ加えてええこといわったんやで。

麻樹ちゃんらが言ってくれたんは、今このふぶきの野原に自分もいっしょに立ってるんよね。だから、自分にもビューツとつきさすようにつめたい風か吹きつけてる。だから、地蔵様もきつとつめたいだろうなと言ってる。

で、秀郎君は、でもまだ私の方がましだな、て思えるて言わるんやね。そこ、もういっぺ

ん言ってくれる

秀郎 地蔵様は動けへんし、じいさまは動けるでな、家に帰っているりにあたったりできるけどな、地蔵様は、家もないさかい、暖められへん

好 地蔵様が人間やったらな、連れて帰って暖めてあげられるけどな、地蔵様は石やでな、人間のように歩けへんで

朱音 もし地蔵様が歩けたら、自分の家へ連れて帰っているりとかで暖められるけどな、石やから、できたらそうしてあげたいけどな、できひん。

T 立つてるしかないんよね。

則和 じいさまはな、家があるし、いろりとかにあたってあたたこうなるけどな、地蔵様はずっと立ってなあかんでな、せめてお堂があったらええけんどな、それもないしな、木もない。

麻美 地蔵様、いつも見守ってくれてるんやでな、大事にしてな、言うてるん。

卓 お堂はないしな、見てたらあんまりかわいそうで

T ああ、あんまりかわいそうで、思わず声が出た。

ももみ なけてくる。地蔵様見てたらな、もしおじいさんが地蔵様やったらどうしようか
なつて

T はい、

ところでね、土曜日の勉強で貴之や茂がもうひとつむずかしいこと言うたんよね。それを今日はみんなで考えてみようと思うん。

これを見てたら、市場で何も買えなかった自分のことが思い出されてくる、こういう言い
かたをしやつた。貴之、そう言うたね。茂もそう言った ね。(二人うなずく)

それ、みんなわかる？

何となくわかる、いう人

C (6人挙手)

T じゃ、全然わからないという人

C (多数)

T じゃ、貴之と茂にもういっぺん言ってもらおうな

貴之 うんとな、おじいさんにはな、お堂もないし、木のかげもないでな、おじいさんも
何にもないでな、自分にてるでな、おもちが買えんかったこと思いだすん。

T 貴之は、なんか、てぶらで何もなしで帰る、家へ帰ってもお正月の用意も何もできな
い、そういう自分と、ふぶきの野原でお堂も何にもなしにたっている地蔵様とがいっしょ
に見える、言うてやるんやね。それ、わかる？

けい子 なんかな、かさがじいさん 売れんかってなこっちの地蔵様もな、何も作って
くれやれんでなんかいっしょの気持ち

則和 じいさまは、どうせ家へ帰っても何もなし、ばあさまもがっかりするんやし、地
蔵様もな、ずっと立ってたらな、ひどいしな、気持ちもなくなってしまうさかいな、同じ
気持ちなん

ももみ 今がふぶきでなかったらな、みんなおそなえもんあげるしな、じいさまもそれ見
てると、なんでわたしらのところだけ(不明)

T ふつうなら、おそなえものをあげて大事にする地蔵様がほったらかしにされている

じいさまも市場で一生懸命売ったんだけど、だれか相手にしてくれる人あったの？
C 一人もない

T だれも相手にしてもらえなかったね。一人ぼっちやったね。一人ぼっちだった自分と、ポツンと立 っている地藏様が同じに見える。

それから、茂の言ったのもういっぺんいってくれ る？

茂 地藏様かて心があるんやでな、

T どんな心があるの、今この地藏様は。

C さみしい

C さむい

茂 ほんでな、じいさまは売れんかったで悲しい

地藏様を見ると、また悲しいなってきたん

T 明仁、わかった？

明仁 地藏様は、さみしい。ほんでな、じいさまは町でかさこが売れんで悲しい。だからよけい悲しいん

繭子 なんか、地藏様はさみしいしな、じいさまは町でかさこが売れんかったでさみしいしな、ほんで 、じいさま、地藏様の気持ちがようわかる

チャイム

結果的には、一回目の授業と比べてそう変わったものにはなっていない。ただ、一回目の授業では、聞き役でしかなかった子供達も発言してきている。理屈でなく、ふぶきの野原の状況と結びつけた、子どもらしい具体的なイメージで語っている。

この二つの授業を通して改めて思うことは、子供達にとって、登場人物の心情を豊かに想像するということは、その場面の情景を文に即して具体的に描き出していく作業の中で自ずと行われる、ということである。逆に言えば、情景を具体的に描き出すことを抜きにして心情の追求を急げば、理屈の言いあいになるか、子どもが授業から離れていくことになる。

(4) 子どもが感覚的にとらえているものを文に引きもどして明確にしていく

子どもは、教師の予想以上に感覚的に鋭いものを持っている。一読ただけで、核心にふれるような内容を語りだしてくることもしばしばある。でも、それは言わば感覚的なもので、必ずしも文の具体を読取ってのことではない。だから、子どもが感覚的にとらえて出してきたものを文章に戻って考えさせることが国語の授業では大事な仕事になる。

次に挙げるのは、そうしたことをねらってやってみたものである

《帰ってきたじいさまを迎え入れる場面》

【授業記録】

前略

T じゃ、ここ読んで

「おおおじいさまかい、さぞつめたかったろうの。かきこはうれたのかね。」

C (何人かの子に読ませる)

T ばあさま、じいさまを待ってたね。

ばあさまは、じいさまのこと、かきこのこと、どっちを心配して待ってたの？

C s じいさま！

T かきこのことが心配だったという人

C (0人)

T じいさまのことがうんと心配だったという人

C (全員)

C わけ言える！

T 文章からみつけてごらん。じいさまのことをうんと心配してたというのは、どこからわかる？

C (ふぶきやで、などと口々に言ってる)

麻樹 「さぞつめたかったろうの」

T そこがどうなの？

麻樹 そこが……………

T ここを読むと、かきこのことよりじいさまのことがうんと心配なんだってことがわかる、というの。だれか、わかる人ない？

C ……………

慎吾 うんとな、こんなひどいふぶきやったらな、じいさまたおれてるかもしれん。

裕二 「さあさあじいさま、いろいろにきてあたってください」

T そこが？

裕二 じいさま、一人で売りに行ってな、帰りにふぶきになって、白うなってきたでな、

「さあさあ」て言うてる。

T そうそう。ぱつと開けてみたらじいさまは、

C まっ白々

洋平 てぬぐいまでなかったで

則和 ふぶきの野原やでな、おじいさん年寄りやでな、とちゅうでこごえ死んでしまうかと思ってるさかいな、心配して。ほんで、「さあさあ」て、はようゆっくりしいて言うてる

T うん

好 「さぞつめたかったろうの」いうところとな、

「さあさあじいさま」のところはな、かきこのことは、一回しか言うてへんしな、じいさまのことは、二回も言うてるでな、かきこのことはほんなに心配してへん

C 一回しか言うてへん

T うん。じいさまとかきこのこと、どっちが大事にしたかということは「おおおじいさまかい……………」の中からもわかるよ。

洋平 「おおおお」て二回も言うてる。

おばあさんにとつてはな、かさこのことより、もちこが買えんことぐらい、どうせつけなでもかん で正月したらいいで。おじいさんがいなくなったら、ひとりぼっちやし、さみしいでな、おじいさんさえいたらいいの。

裕二 かさこ売れんでもいいでじいさまのことだけが大事なん

T うん。そのことが、ここにちゃんと書いてある。 「おおおお……………」

もし、かさこのことが心配なら

のりゆき 反対になる！

T お、のりゆき見付けたな

C わかるわかる！

けい子 ばあさまが、もしかさこのことが大事やったらな、「かさこは売れたのかね。」を先に言う

記録を読み返してみると、子どもが言葉から感じて出してきたものをもっと私の方できちんと受止めて、説明を補ってやったりしながら、みんなに広げるべきだったと思う。だが、一応、私がここでねらったことについて、子供達は、見事に言葉を捕まえている。子どもというものは、本来言葉に鋭敏に反応する力を持っているのだということ改めて思う。

